



Title	慢性下顎骨々髄炎の病態に関するX線診断学的研究
Author(s)	川井, 直彦
Citation	大阪大学, 1981, 博士論文
Version Type	
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/32910">https://hdl.handle.net/11094/32910</a>
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 <a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed">https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed</a> 大阪大学の博士論文について

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍) 川井直彦  
 学位の種類 歯学博士  
 学位記番号 第5238号  
 学位授与の日付 昭和56年3月25日  
 学位授与の要件 学位規則第5条第2項該当  
 学位論文題目 慢性下顎骨々髄炎の病態に関するX線診断学的研究

論文審査委員 (主査) 教授 渕端孟  
 (副査) 教授 八木俊雄 教授 作田正義 助教授 中川皓文  
 講師 三村保

### 論文内容の要旨

顎骨は他の骨格系に比し、骨髓炎に罹患する頻度が著しく高いが、これは歯牙が感染門戸となることが大きな要因である。

近年抗生素が多用されることから、従来のごとく激烈な症状を呈する急性期のものがほとんど見られなくなり、一方で著明な症状を呈しないままに慢性化する症例が増加しているといわれているが、その本態に関する体系的研究は未だない。また従来の本疾患の分類はいづれも一連の病態経過中の一現象を基準になされたもので、必ずしもこの疾患の本態を示すものではない。従って、一時期の症状に重点を置いた従来の分類では、病態が複雑多様に変化する本疾患に適切に対処することができず、診断・治療に際し問題となることが多い。

本研究では、慢性下顎骨々髄炎における病態をX線診断学的に解析し、臨床的にきわめて多様性を有する本疾患のX線的診断基準を明確にするとともに、その病期分類を試みた。研究対象は、1966年4月から1978年9月までに大阪大学歯学部附属病院を受診し、下顎骨々髄炎と診断された患者で、下顎骨に病的所見が認められた191例で、そのX線所見について、1) 骨溶解像、2) 反応性骨形成像、3) 骨皮質への侵襲様相、4) 壊骨形成の有無を検討した。まづ反応性骨形成像を分析した結果、基本的に著明な外骨膜反応によって骨膨隆を呈するものと、そうでないものの2型が存在することがわかり、前者を骨膨隆型、後者を非骨膨隆型とした。そしてこれら2型の臨床所見ならびに前述のX線所見を詳細に検討するとともに、臨床的、X線的に経過観察の可能であった64例について病態の経時的推移を追跡観察した。その結果、臨床所見の分析から、骨膨隆型は20才未満の若年者に高頻度を示し、好発部位は下顎上行枝部であったが、非骨膨隆型は20才以上の比較的高令者にその頻度が高く、

小・大臼歯部に好発していた。また治療経過においては、骨膨隆型の方が長期経過をとるもののが多かった。X線的には、骨膨隆型は著明な外骨膜反応像と多発性骨溶解像を呈し、骨皮質への侵襲が顯著に認められ、内骨膜反応像も非骨膨隆型より著明であった。腐骨形成は非骨膨隆型に多く認められた。また骨膨隆型に見られる下顎骨の変形は4つのタイプに大別される外骨膜反応像によるものであった。病態の経時的観察によって、症例が良好な場所をとる場合は、X線的に骨溶解像ならびに外骨膜反応像の減少が約2.5カ月で確認され、正常な骨梁走行の出現が平均3カ月、下顎管の修復が平均3.2カ月、正常な骨皮質の出現が平均5年の期間でそれぞれ確認された。また下顎骨の変形は、との骨皮質が存在し、かつその変形が外骨膜性の幼若な新生骨によって構成されている場合は、炎症刺激の消失とともに、との形状に回復した。一方外骨膜性新生骨が次第に骨添加を生じ、骨皮質と同程度に硬化した場合は、炎症例激が消失しても、その形状は容易に回復しなかった。病態が増悪する場合は骨溶解像と外骨膜反応像の拡大・増加が見られ、外骨膜反応像の変化は通常1~3カ月でX線像に出現していた。また内骨膜反応像は、感染後約3カ月から4カ月に通常のX線検査で確認され、約1年で均一な硬化像を呈するにいたる。しかしながら、観察期間が6カ月以内の場合には、病巣の変化がほとんど認められないことがしばしばあった。

このような臨床的、X線的病態の推移を検討した結果、本疾患を3期の病期に分類することができた。

以上、本研究において慢性下顎骨骨髓炎のX線的診断基準を明確にした。すなわち、外骨膜反応像は外骨膜ならびに骨髓の炎症刺激に対する反応性を示し、この所見からX線的に本疾患を骨膨隆型と非骨膨隆型の2型に分類することが妥当であると考えた。

同時にX線的に内骨膜反応像は病態の慢性傾向を表現するものであり、骨溶解像ならびに骨皮質への侵襲様相は病巣の活動性を示すものであることをのべた。また病態の推移から本疾患をX線診断学的に3期の病期に分類した。

これらの結果は臨床的・X線診断学的にきわめて多様性を有する慢性下顎骨々髄炎の診断、治療、予後観察さらには類似の病態を呈する疾患群との鑑別診断において重要な指針をあたえるものであると考える。

### 論文の審査結果の要旨

本研究は慢性下顎骨々髄炎の病態をX線診断学的見地から検討したものである。従来ほとんど系統的な研究が見られなかった本疾患のX線診断について明確な基準を設定し、病型分類を試みるとともに病態の推移を経時的に詳細に検討した。

本論文は、近年発現頻度が増加し、加うるに病態がきわめて複雑多様とされる本疾患の診断、治療予後観察に関して、臨床上重要な知見を得たものとして価値ある業績であると認める。

よって本研究者は歯学博士の学位を得る資格があると認める。